

情報共有 | 5枚 (非管理メモ)

官邸、NISA班 ← プレス対応チーム

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成23年7月25日(月) 11:00~11:55

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約25名(カメラ3台)

当方：子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ(水位・圧力・温度などのデータ)
- ・ 集中廃棄物処理施設 サブドレン水核種分析結果(7月25日)
- ・ 淡水化装置(R0)の概略系統図

よりプラント状況・配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 淡水化装置の逆洗ポンプの原因は不明で、まだ装置は復旧していないという理解で良いか。

A. その理解で良い。淡水化装置のR01AとR01Bで処理を進めている。

Q. 福島地域支援室の会見では、淡水化の処理量が通常運転時の50m³/hの半分である25m³/hではなく、10m³/h程度との話があったが。

A. 淡水化装置の流量としては25m³/hで流しているが、実際には塩分の濃い水と淡水化した水に分かれるので、淡水化の処理量としては、25m³/hの半分弱で約10m³/hになると思う。もともと淡水化装置では、約1,200m³/日の処理をして、淡水化される水は480m³/日と評価している。

Q. 昨日の17時44分からろ過水をバッファタンクへ補給しているが、原子炉に注水している水の中の処理水とろ過水の割合は。

A. はっきりとした割合は分からない。ろ過水の補給は完結的に行っているので、今回で3回目になるが、週単位では割合として出せるかもしれないが、日々の割合については算出できない。

Q. ろ過水の補給は、バッファタンクの水量が足りなくなると補給するという認識で良いか。

A. 今回はバッファタンクの水量が少なくなり、夜間に水源の切り替え停止することを回避するため、R0処理水一時貯槽にまだ余裕があったものの、17時44分にろ過水の補給を行った。現状、淡水化装置を動かしても処理水量は約10m³/hで、原子炉注水量は約16m³/hなので、ろ過水の補給を続けていく必要がある。

Q. バッファタンクに補給したろ過水の総量はどれくらいか。

A. 先週ろ過水を補給した量が約 610 数 m^3 、一昨日が約 650 m^3 、今回は半日程度補給しており、これらを加えた量が総量になるが、ろ過水タンクから淡水をどの程度補給したかについては毎週水曜日の週報でご提示させていただきたいと考えている。

Q. 砂ろ過装置と逆洗ポンプの機能を詳しく教えていただきたい。

A. 淡水化処理装置の中の水には不純物が溜まっており、これを砂ろ過装置でろ過し、ろ過水槽に砂がとれた後の水が溜まる。その大部分の水は RO 装置に流すが、一部の水を逆洗ポンプで逆流させて、砂ろ過装置の目詰まりをふり落とす。今回はその逆洗ポンプの吐出圧力が低くなったため、一度逆洗ポンプが停止したため、淡水化装置全体が停止したということである。

Q. 淡水化装置が運転中は、逆洗ポンプも一定の割合で稼働しているということか。

A. おそらく砂ろ過装置の差圧を見て、差圧が高くなると逆洗ポンプを起動して目詰まりをふり落とすのではないかと思うが、運用方法については確認させていただく。

Q. 今回、3号機の原子炉注水量を $9m^3/h$ から $8m^3/h$ へ低下させるとのことだが、水処理装置のトラブルが続いており、稼働率が悪くなっているの、汚染水の発生抑制という目的か。

A. 汚染水処理の稼働率があまり向上していないこともあり、タービン建屋の溜まり水を減らすことを考えている。圧力容器の温度が順調に低下しているの、 $1m^3/h$ 程度の流量の低下では温度に大きな変化はないと考えている。温度の状況を見ながら注水していく予定。

Q. 3号機の崩壊熱に見合う注水量は計算上、最低どれくらいと考えているか。

A. おそらく約 $1.2m^3/h$ 未満だったと思う。3号機は圧力容器からの漏えいが多いものと考えており、現在 $9m^3/h$ での注水を行っている。

Q. 1号機に対して2・3号機の方が格納容器の容量は大きいと思うが、2・3号機窒素封入量が少ないのはなぜか。

A. 原子力安全・保安院への報告書にも記載したが、窒素封入量は、格納容器内にどれくらいの水素が発生しているかで決めている。水素は水・ジルコニウム反応か水の放射線分解で発生するが、現在は水の放射線分解で水素が出ていると考えており、窒素の封入量は水の放射線分解の量で評価している。

Q. 1号機の燃料は少ないと思うが、水の放射線分解の量は2・3号機よりも少ないということか。

A. 2・3号機に関しては、水の放射線分解の量で計算していたと思うが、1号機の窒素の封入量をどうやって求めたのかについて、再度確認させていただく。

Q. 淡水化装置の処理量が減っていくことで、上流側の除染装置側への影響はないのか。また、処理量が減ることで、サブプレッションプール水サージタンクの処理水量は減らさなくて良いのか。

A. サプレッション水サージタンクの容量は3,500m³で、アレバの除染装置から出てくる水量は37m³/h、淡水化装置の処理量は25m³/hであり、12m³/hの差があるので、サプレッション水サージタンクの残りの水量を確認しながら淡水化装置を稼働していきたいと考えている。まだ容量の半分以上の空きがあるので、すぐにアレバの除染装置を停止する必要はないが、この状態が継続すると、除染装置を停止する必要があるかもしれない。

Q. 淡水化装置のRO2の再開の見通しは。

A. 逆洗ポンプの点検、原因の調査が進んでいないので、もうしばらくかかると思う。再開の見通しはまだない。

Q. RO1AとRO1Bの水処理容量が11.25m³/h、12.5m³/hと低い設定になっているのはなぜか。また現在の状態では断続運転ではなく、連続運転を行っていくのか。

A. RO1AとRO1BはRO2のバックアップと考えていたので、能力的に50%程度として考えていたと思うが、詳細は確認させていただく。また当面、パuffアタンクへの移送の必要もあるため、淡水化装置は連続運転を行っていく。

Q. 蒸発濃縮装置の準備状況はどうか。

A. 蒸発濃縮装置は2段階の予定であり、8月に第1段階、10月に第2段階を準備し、2系列作る予定である。

Q. IAEAの天野事務局長のスケジュールと東電の対応者、また既に吉田所長と会ったのかを教えてください。

A. 天野事務局長は、福島第一原子力発電所に入ったようである。当社の小森常務が対応している。吉田所長が天野事務局長と会話をするのかは決まっていない。実績などが分かればお知らせさせていただく。

Q. 天野事務局長の詳細なスケジュールや視察する場所を教えてください。本日中に東京に戻るとのことだが、午前中のスケジュールだけでも教えてください。

A. 詳細に関しては、事務局にお問い合わせいただきたい。

Q. 今朝の地震の福島第一原子力発電所への影響は。また現在、使用できる地震計の数は。

A. 原子炉への注水、窒素封入は継続しており、設備に異常はなかった。6号機の原子炉建屋の地下マットで観測した値は水平で28.2ガル、上下で20.1ガルになる。

Q. 過去に2度ろ過水タンクからパuffアタンクに淡水を移送した際の経緯は。

A. パuffアタンクの水位が低下したことから、過去2度パuffアタンクに淡水を注水している。

Q. 現在は、淡水化装置の処理量が注水量を上回っているため完全な循環注水冷却ができていないが、このことをどのように受け止めているのか。

A. 現在、淡水化装置も含めた水処理装置全体が安定的に運転できておらず、淡水化

装置も 10m³/h 程度しか処理していないので、他からの補給なしで原子炉に注水する状態でないため、引き続き水処理装置の信頼性向上が必要だと考えている。

Q. 7月30～8月5日の供給力を5,710万kWと見通しているが、この中には全ての自家発電や揚水発電を含めた数値か。

A. 当社で使用可能と判断しているものを含んでいる。160万kWの自家発電と揚水式水力は700万kWを見込んでいる。

Q. 7月の供給力の内訳は。

A. 一般水力が310万kW、揚水式水力が700万kW、火力が4,230万kWで内自家発電・剩購入等が160万kW、原子力が490万kW、融通がマイナス10万kW。

Q. 揚水式水力と自家発電剩購入を含めると供給力に余裕ができたと指摘する人がいるがどうか。

A. 需給については引き続き厳しい状況であると認識している。供給力は5,710万kWに対する需要は5,500万kWで、約210万kWの予備力と未帰している。万一の事故等でプラントが停止することや、異常な猛暑となることも考えられるため、需給状況は厳しい状態であると認識している。

Q. 国が要請している15%の節電は必要であると認識しているのか。

A. 節電の効果も出ており、引き続き節電については皆さまざまのご理解とご協力をお願いしたいと考えている。

Q. 15%の節電よりももう少し少なくてもいいという考えはないか。

A. 今のところ210万kW程度の予備力があるが、万一の事故等の発生も考えると引き続き節電のお願いはさせていただきたいと思っている。

Q. 淡水化装置の廃液RO供給タンクの役割は。

A. SPT受入タンクから淡水化装置までの距離が長いので、このような受けタンクを設けている。

Q. 淡水化装置のフィルタを洗浄する際はROの1Bと1Aを稼働させているのか。

A. 連続運転中はそのような運用になり、サブプレッションプールサージタンクの入水量が下がっている場合は淡水化装置を停止するので、その際に点検修理が可能であると思っている。

Q. 連続運転中、RO2はどの程度の時間で洗浄が可能なのか。

A. どのような方法で逆浸透膜をメンテナンスしているかは確認させていただく。

Q. これまでに淡水化装置1Aと1Bを稼働させたことはあるか。

A. 確認させていただく。

Q. 淡水化装置の不具合の原因は調査中とのことだが、調査には時間はかかるのか。

A. 初めての事象なのでよく調べたいと考えている。

Q. 淡水化装置がトラブルで停止したのは初めてか。

A. 今回で2回目である。前回はSPTタンクの廃液排出ポンプが停止し、淡水化処理装置が止まっており、淡水化処理装置自体の不具合により停止したのは今回が初めてである。

Q. 水処理装置を停止せずにベッセルを交換するのは初めてか。

A. 初めてではない。これまでもベッセルの表面線量が低い場合はオンラインで交換しており、高い場合はフラッシングした後に交換している。

Q. ベッセルの表面線量が日によって上下する理由は。

A. プロセス主建屋に貯めている水にも濃いところ薄いところがあるため、吸い込む水の濃度によって差が生じるものと考えている。

Q. ベッセルの表面線量は高い場合と低い場合でそれぞれどの程度か。

A. 高い時は7、8 mSv/hの場合もあるが、低い時は4 mSv/hを下回ることもある。

Q. 砂ろ過装置を逆洗する際は、広範囲で装置が停止するのか。

A. 運用方法は確認させていただく。

以上